

今年(2015年)の1月25日、桜美林大学孔子学院で開かれた「日中口述歴史文化研究会」主催の懇話会に参加した。

この会の案内書には、「禹王遺跡」についての講演があると記されていたのでこれは是非とも聞いてみたいと思い出席した次第である。講師は、「日本と中国の禹王遺跡行脚研究家」であり、「足柄の歴史再発見クラブ」の顧問でもある、大脇良夫氏である。氏は、知る人ぞ知る禹王の顕彰碑のある神奈川県の開成町にお住まいの方である。私はこの顕彰碑は、数年前に全国紙の夕刊に投稿された法政大学の王敏教授の書かれた文章の中にある写真で知り、さっそく切り取ってスクラップブックに貼り付けた。おおよその場所は分かるので、いつの日か機会を見つけて行って見ようと思いつつ今日まで来てしまった。そのような次第で参加したのである。

「禹王」は中国に関心のある方ならご存知の方も多いと思うが、中国最古の「夏王朝」の始祖である。夏王朝は、紀元前21世紀頃～紀元前16世紀頃とされており、「史記」によれば初代の禹から末代の桀まで17代で470年余り続いたと記されている。中国の歴史は、神話と伝説の時代を除けば「夏」から「商(殷)」、「周」と変遷し、春秋時代を経て紀元前221年に秦の始皇帝による国内統一となるのはご承知のとおりである。「夏王朝」は以前は伝説の範疇であったが、考古学の進歩などで今は実在の王朝と認識されてきたようである。

黄河中流域は、世界四大文明発祥の地として名高いが、しばしば氾濫し住居や人々に甚大な被害を



禹王碑の軸装 ㊦ 1919年建立・群馬県沼田市利根町平川の禹王碑 ㊧ 年代不詳・中国・西安碑林博物館蔵「重刻峽嶼禹文碑之一」 ㊨ 1666年建立・中国西安碑林博物館「禹碑」
(いずれも大脇良夫氏所蔵)

もたらしていた。統治者にはこの暴れ川を治めることが求められたのである。そしてついに禹が治水に成功し、夏王朝を興し初代皇帝になったと言われる。彼は、「治水の神」と崇められ、私は一か所も

見たことはないが中国各地にその遺跡があるようだ。中国と一衣帯水に位置する日本にも、遣隋使や遣唐使等を通じて禹の治水の功績は伝えられたであろう。古事記や日本書紀にも禹王のことが書かれているというから驚きであるし、日本と中国の関係の深さに思いを深くする。両国は未来永劫に仲良くしていかなければならないという思いを強くする。

治水対策と言えば、日本と中国にすぐ思い起されるところがある。人によっていろいろであろうが、私が思い起こすのは日本では武田信玄が築いたといわれる「信玄堤」である。これは、山梨県甲斐市にある堤防である。甲府盆地



三門峡ダムの大禹像

を流れる「釜無川(かまなしがわ)」は昔から大雨による水害がしょっちゅう発生した。特に御勅使川(みだいがわ)が流れ込む釜無川の合流部分は水害が多かった。信玄は合流地点である竜王に堤防を築き、御勅使川の流路を北に移し釜無川の流路を移すという工事を20年以上の年月をかけたという。その結果、洪水は殆どなくなり農業生産も上がったようだ。家内の実家が葦崎市ということもあり、このあたりはよく車で通ったことでなじみがある。なお、この釜無川は笛吹川と合流して富士川と名前を変え、駿河湾に流れ注いでいる。

中国では、四川省成都市郊外の「都江堰」(2000年に世界遺産登録)が頭に浮かぶ。この堰は、李という名の親子が苦難の末造り上げた堤である。つまり禹によるものではない。このあたりには岷江という河川が流れており、大昔から氾濫により農民を苦しめ続けていた。この河川をどのように治めたかという、大河を外江と内江に分離し洪水により内江が一定量を超えると溢れた水を外江に流すようにした「飛沙堰」をつくり、また灌漑用の水門を造るなどした。私は、2012年に現地を見たが、人間が造ったとはとても思えない規模の大きさに驚き、かつ如何に難工事であったかを想像してみた。土地の人はその功績により二人を神様(王)として扱い、都江堰が見下ろせる丘の中腹に「二王廟」を建立した。ちなみに2008年の四川大地震で建物は倒壊したそうであるが、私が行ったときは立派に再建されていた。

では禹はどのような治水事業を行ったのであろうか。なにしろ今から4千年も前のことであるから、神話の世界であるが、前述の大脇さんを中心に



河南省鄭州市の黄河遊覧区に立つ巨大な禹王像

長年研究された結晶である「治水神・禹王研究会誌」(以下会誌という)にすこし書かれている。その部分を抜粋すると下記のように書かれている。

「中国の神話では、禹は頻発する黄河流域の洪水を治めるため、山野を開き湖を浚渫するなど、13年をかけて各地で治水工事を行ったとされています。」(海津市歴史民俗資料館学芸員・水谷容子氏)

ところで日本では禹王遺跡がどのくらいあるのであろうか。会誌によれば、今後、掲載予定の遺跡を含めると北海道から沖縄県まで100か所近く

ある。その内容は記念碑、廟、掛軸などいろいろだがこのうち石碑は会誌で確認できるもので約50か所ある。これは庶民が治水の神のご加護を願った証である。また、日本各地で如何に水害に悩まされて来たかの証左でもある。

大脇さんは、「日本全国にはまだいくつも記念碑があるはずだ」と言われていたが、この文章を読まれて「自分の故郷で禹〇〇という石碑を見たことがある」と思われる方は是非大脇さんにご一報いただければ幸いである。では本場の中国ではどのくらいあるのであろうか。答えは「数えきれないくらいある」である。

そのなかでいくつか代表的なものを、会誌からご紹介したい。もちろん私は講演と会誌を見るまでは殆ど何も知らなかった。河南省に「禹州市」という街がある。市名をみただけで禹王と関係がありそうだ。この街は省都の鄭州の南に位置している。黄河からも近い。ここには禹王廟、禹王碑、禹王像などがあるそうで禹のテーマパークと言えるくらい禹一色と書かれている。さらには禹州市から洛陽に向かう途中に「登封市」という名の街がある。ここ



毎年5月5日は文命*)祭。文命西堤にて。2014年5月5日祭事前の様子。㊦文命西堤碑、㊧文命宮、ともに1726年建立。 [*文命(ぶんめい)：禹王の名]

には太室山と少室山が厳しく聳え立ち、山麓の傾斜地に方形の市街地が拡がりあたかも京都を彷彿させる街だそうだ。禹は塗山氏の娘を娶り啓という皇子をなしたが、この母を称えた啓母廟史跡があるそうで、そこにたくさんの遺跡があるらしい。この街の西方約4kmのところにある「左庄村」は禹王の生誕地との伝説がある。

次はガイドブックからのものであるが、二つ紹介したい。まず紹興市には、「大禹陵風景区」があり、禹陵、禹祠、禹廟の3つの建物がある。つまり禹のお墓であるが、これとて伝承の域を出ないようだが有名な観光スポットである。もう一つは武漢市にある「晴川閣」である。この楼閣は長江の川岸にあり、川を挟んで黄鶴楼と対面しているが、夏王朝を築いた禹を称えるために16世紀、明の時代に建てられ

た。古代から長江の氾濫に悩まされてきた農民の気持ちの表れであろう。晴川閣の名前は、盛唐の詩人・崔顥(生年不詳～754年)の有名な漢詩「黄鶴楼」注)の一節「晴川歴歴漢陽樹」からとったものである。



まだまだあげればキリがないであろう。日本と比べれば中国の遺跡は質、量とも遥かに凌駕しているがそれは致し方ない。それでも禹の功績が日本に伝わったことは、まことに喜ばしいことであるし、それを研究されている方が大勢いらっしゃるのも嬉しいことである。会誌に書かれているが遺跡は台湾や朝鮮半島にもあるらしい。本研究会は、2010年から日本各地で「全国禹王サミット」と称して毎年研究の成果を発表されたり、中国との交流を重ねておられると聞く。

会誌の中で「足柄の歴史再発見クラブ」の関口さんが、「この活動が日本と中国だけでなく東アジアを分母とする壮大な共同研究に発展することを願うとともに、日中間に依然として横たわる深い溝を埋める貴重な架け橋となることを確信している。」と書かれてる。まったく同感である。この研究会が一層成果を上げられ、東アジア諸国の友好に貢献されることを祈念しつつ、筆を置きたい。

(本稿の写真はすべて大脇良夫氏撮影)

注)

黄鶴楼

崔顥

昔人已乘白雲去，此地空餘黃鶴樓。
黃鶴一去不復返，白雲千載空悠悠。
晴川歴歴漢陽樹，芳草萋萋鸚鵡洲。
日暮鄉關何處是，煙波江上使人愁。

黄鶴楼

昔人 已に白雲に乗りて去り、
此の地 空しく余す 黄鶴楼。
黄鶴一たび去って復た返らず、
白雲 千載 空しく悠悠。
晴川歴歴たり 漢陽の樹、
芳草萋萋たり 鸚鵡洲。
日暮 郷関 何れの処か是なる、
煙波 江上 人をして愁えしむ。



さかわがわ 酒匂川*) 右岸(福澤神社境内)の文命遺跡群。左から、奉再建文命社御宝前塔(1807年建立)、堤記、文命宮、文命東堤碑(3碑とも1726年建立)、文命用水碑(1936年建立)。白い、生け垣の向こうに酒匂川が走る。

*)神奈川県西部を流れ、小田原市の東で相模湾に注ぐ。